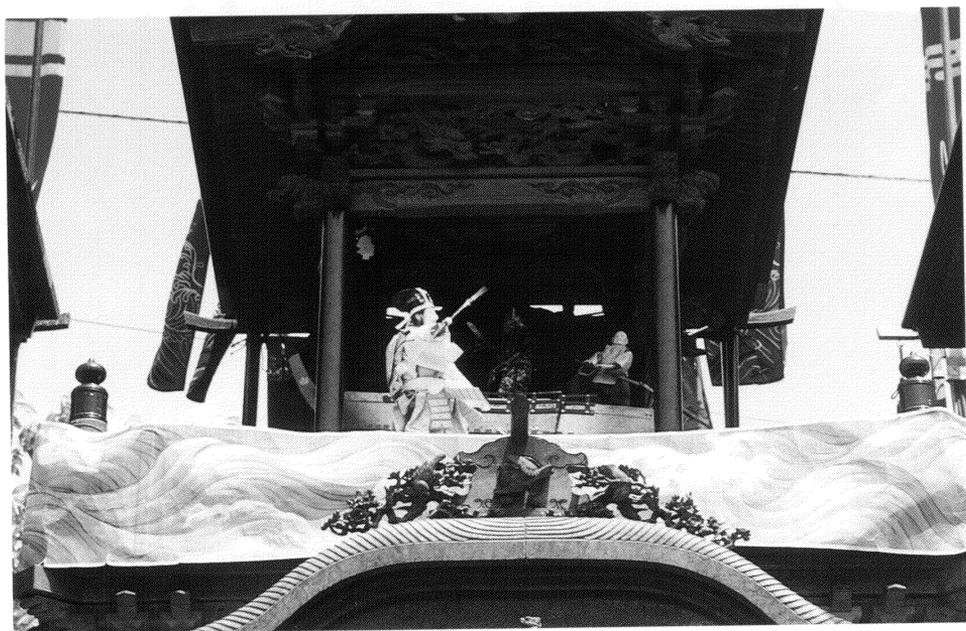




田中組神楽車の上で、傀儡師が背中合わせに踊る唐子を遣っているところ。  
上段には桜模様の幕が張り廻らされている。



山車の上で、弁慶が数珠を押しもんで、竹田風車で薙刀を振り回す知盛の幽霊を禊り伏せようとするところ。上段の幕が波模様のものに張り替えられている。

## 田中組「傀儡師」の人形とそのからくりの構造

### 山 田 和 人

竹田からくり「傀儡師」は寛保元年（一七四一）には江戸において興行されており、竹田からくりの本拠地である大坂では、それより以前に既に上演されていたものと推定される。それ以後、竹田の江戸下りの時にはよく上演されていたようである。この竹田からくり「傀儡師」と、ほぼ同じ構造を持ったからくりが愛知県半田市亀崎の田中組神楽車に伝承されている。両者の関連については、既に拙稿「竹田からくり「傀儡師」について」フィールドと文学史の接点<sup>①</sup>において、その動態を中心に竹田からくりの絵巻や番付と田中組「傀儡師」の比較検討を行なった。その結果、田中組に伝承されている「傀儡師」が、竹田からくりのそれとほぼ同じ構造と動態をもったからくりと考えてよいのではないかと、いう結論を得た。

ただし、その際には、竹田からくりの動態を明かにするために、田中組の「傀儡師」についても、その人形の動きを中心に検討を加

えることになった。そのために、田中組の「傀儡師」の人形そのものや装置等については十分に触れることができなかった。

また、ここでは、「傀儡師」の載せられている神楽車との関連についてはわずかに触れるに止まった。だが、本来、田中組「傀儡師」は山車からくりであり、山車の上で奉納上演されるからくりである。その意味で、このからくりは、山車からくりとしてのあり方に即して紹介をしておかなければならない。

そこで、本稿では、からくりの人形や装置とともに、山車との関連も考慮しながら、田中組「傀儡師」の紹介と分析を通して、竹田からくり「傀儡師」の構造について仮説を提示してみたい。ただし、山車本体の構造については『半田市史』芸能民俗篇に詳しい報告がある<sup>②</sup>ので、それに譲る。本稿では、からくり人形との関連から山車の構造について言及するに止める。ただし、田中組の「傀儡師」に

ついでには、前稿においてもその動態を中心にではあるが、既に紹介と分析を試みており、本稿と重複するところがあることをあらかじめ断っておきたい。

なお、田中組の「傀儡師」のからくり人形の操作方法については稿を改めて論じたい。

### 一 田中組「傀儡師」動態の概要

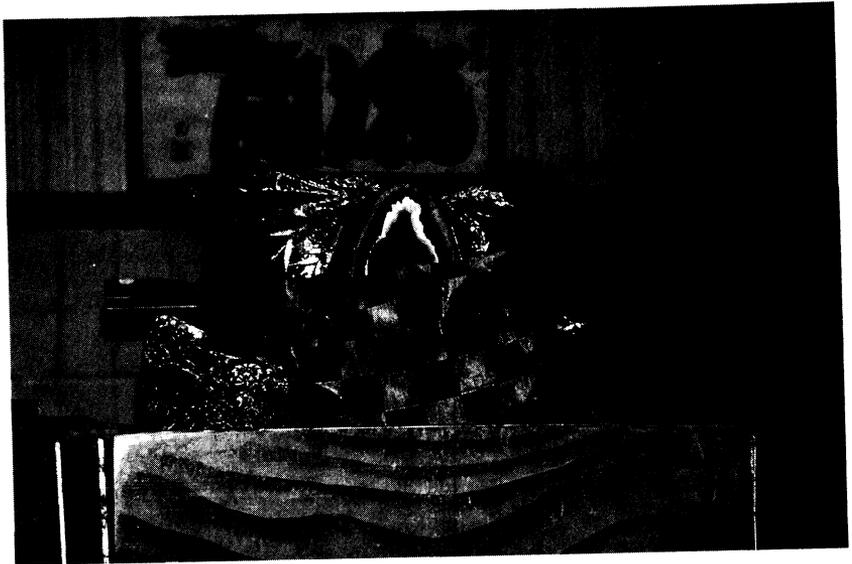
「傀儡師」のからくり人形について検討する前に、まず、田中組の「傀儡師」の動態の概略をまとめておきたい。

「傀儡師」は、三段構成の大からくりである。すなわち、第一「唐子踊り」（序段）、第二「舟弁慶」（本段）、第三「山猫廻し」（終段）となっている（口絵写真）。

序段は、傀儡師の遣う箱人形の唐子の踊りであり、傀儡師歌謡が歌三味線で演じられ、箱からせり上がってきた二体の唐子が、いわゆるチャップパをならしながら、前に向かって、あるいは背中合わせに、または向かい合って踊る。

やがて、その唐子が、箱のなかに納まり、さらにその箱のなかに、傀儡師の上半身が折り畳まれて、姿を消すと、箱が波模様に変わり、その後、舟が出現して、本段の「舟弁慶」の場面へと展開していく。

本段では、舟に義経、弁慶、舟子が乗っている。謡の詞章は、



傀儡師人形が畳み込まれていく瞬間を前（観客側）から撮影したところ。

『舟弁慶』とほとんど同文である。舟子は巧みに舟を漕ぐ所作をしている。やがて、義経一行に憾みをなすべく、平知盛の幽霊が海上に現われる。知盛は、義経を見やり、手にした薙刀を振り回しながら、さまざまに激しい怨霊の所作を演じる。義経も刀を振り上げて応戦する。弁慶は知盛の様子を窺い、打物技ではかなうまいと立ち上がり、数珠を押し揉み、禱り伏せようとする。やがて、知盛の幽霊は禱り伏せられて海中に消えていく。

その後、舟が折り畳まれて消えると、波模様に変じていた箱がもとに戻り、再び折り畳まれていた傀儡師の上半身が起き上がる。

終段では、傀儡師の膝の上の箱から山猫（実際には鼬の剝製）が現われ、囃子歌に合わせて山猫が左右に身体を揺すって、その後、バネ仕掛けで見物の方へ飛び出していく。

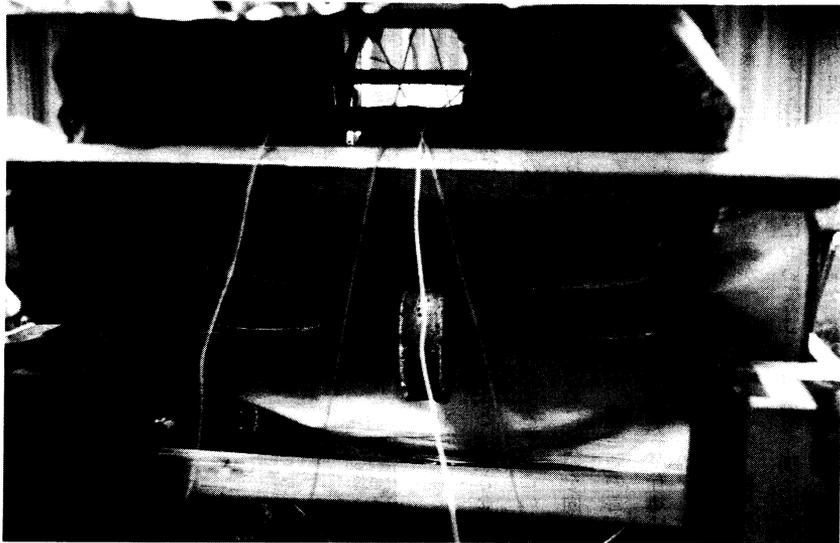
このように、傀儡師が畳み込まれて、舟弁慶の場面に変化し、再び、傀儡師に戻るという一連の動きが大からくりで演じられている。

「傀儡師」の詞章の詳細については前掲の拙稿に譲り、ここでは、まず、この大からくりの人形についての調査結果を簡単に報告しておきたい。

## 一 「傀儡師」のからくり人形

田中組のからくり「傀儡師」の人形は、全部で七種類に及んでいる

田中組「傀儡師」の人形とそのからくりの構造



傀儡師人形が畳み込まれていく瞬間を後ろ（操り手側）から撮影したところ。

る。すなわち、傀儡師の人形、序段の唐子（二体）、本段の義経、弁慶、舟子、知盛、終段の山猫である。これらの人形を、竹田からくりの絵尽や番付等の画証類と比較してみると、その両者の間にきわめて高い相関性を指摘できるように思う。以下順次、田中組「傀儡師」の人形を中心に比較検討していきたい。なお、竹田からくり「傀儡師」の画証類は、前稿において翻刻してあるので、ここでは、最も詳細な絵尽であり、からくりの研究資料としても信頼性の高い「機関竹の林」③を中心に、それとは別系統の「竹田新からくり」④、「機関千種の実生」⑤とに限って比較資料として掲出するに止めたい。

A 傀儡師

まず、傀儡師の人形について、見ておきたい。この人形は、総高が一四〇センチほどであり、座った状態で箱の上に載せている。竹田からくりの画証類がすべて立ち姿で描かれている点からいえば、この田中組「傀儡師」の座した姿は異例であると言わなければならぬ。この点については、やはり、山車からくりという条件が関連しているのではないかと推測されるが、安定感という点から言えば、こうした姿勢の方が都合がよいという面もある。いずれにせよ、この点については十分に明らかにできない。

その首かぶの顔面部分は、縦横ともに十四センチで、目が瞬きできるように細工されている。また、首も左右に動くように工夫されて



折り畳まれた状態の傀儡師

いる。現在、この首は、引き糸を引いていなければ、前にうつ向いた状態になり、正面にその首を固定することはできない。ところが、その首の周辺の内部機構を詳細に調査すると、この傀儡師の首が常に真っ直ぐにおきている状態を保つために、頭を固定した装置に鯨の髭を巻付けていた痕跡が確認できる。傀儡師の首が起き上がった状態になっていればこそ、うなづきの引き糸が有効に働くのであろう。傀儡師を遣う場合に、この鯨のバネがあれば、折り畳まれていく時にも箱に納まる位置が一定してくるので、操作がしやすかつたはずである。この点についてはさらに検討を加えなければならないが、現在の人形の内部機構から窺うかぎり、こうした動きを

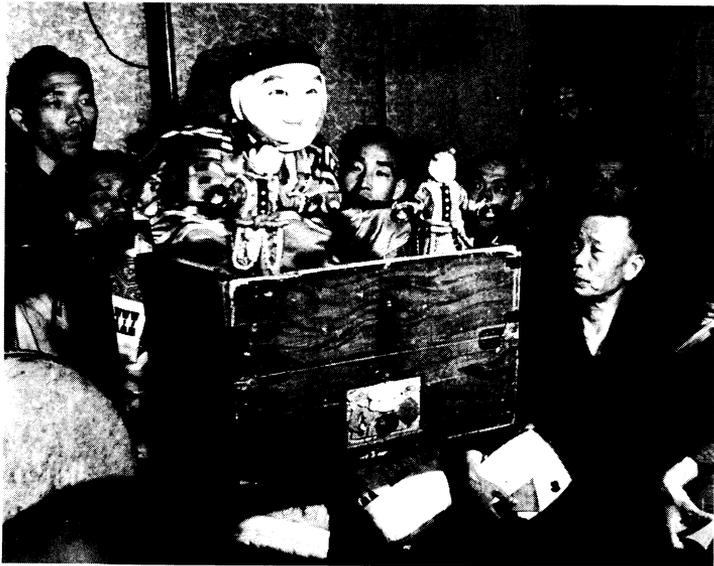
想定することができそうである。とすれば、こうした細かな点に至るまで、傀儡師は、より円滑で操作性の優れたからくり人形であったということになる。

ところで、傀儡師の最大の特徴は、上半身が折り畳まれて箱のなかに納まることである。竹田からくりの画証類のほとんどにある記述の通りの変化を実際に演じてくれる。上半身が折れ曲がるように作ること自体大なる工夫ではあるが、それを箱のなかに畳み込むところがこのからくりの周到さである。すなわち、箱のなかには、既に唐子の人形が納まっており、さらに後に現われる山猫までが仕組まれている。その中にさらにより大きな傀儡師の上半身が納まるというのはそれだけでも意外性をもたらす。

また、傀儡師は操作するときに、背中が両開きになって、開かれた傀儡師の背中が遣い手の操作するところを見えないように、正面と左右両側を隠す働きをしている。

傀儡師の顔の表情は、剽軽さのある柔軟なもので、竹田からくりの「傀儡師」の絵巻や番付類とも共通するところがある。ここでは、田中組の「傀儡師」は、頭巾を被っており、その点からいえば、『竹田新からくり』が、最も近いが、そうした差異はここではそれほど問題にはなるまい。むしろ、そうした傀儡師のある種おどけた表情に画証類との相関性が指摘できる。

なお、傀儡師が唐子を遣うとき、箱に布を被せるのは、首掛けの箱のなかを視かれないためであろうが、傀儡師の古い画証のほとんどには必ずその布が描かれている。現在の田中組の傀儡師は衣裳も



古い傀儡師のモノクロ写真

新調されており、その時に、かつての箱に掛けていた布を人形と一体化してしまったようである。前頁に掲げた古い写真を見ると、明かに薄い布を箱の上に被せて唐子を遣っている。因みに、この写真には、作り替える前の古い傀儡師の衣裳と箱が映し出されている。

## B 唐子

次に傀儡師の箱からせり上がってくる唐子人形に注目してみたい。この二体の人形はいずれも唐風の衣裳を纏っており、その髪形や表情に至るまで、竹田からくりの画証類と一致している。首は長さ五・八センチ、固定台までの人形の総高三四・五センチ、その下の台も含めると総高は三六・五センチとなる。唐子の持つチャップパは、直径が四・七センチある。竹田からくりの絵尺や番付を見てみると、『機関梅早咲』と『機関千種の実生』では、向かい合っているところだが、『機関竹の林』では、正面に並びながらやや向かい合うように描かれている。これらの画証類では、唐子の動きが、向かい合うところと正面に向くところが捉えられていることになるが、田中組の唐子の動きを参照すれば、『機関梅早咲』、『機関千種の実生』と『機関竹の林』の微妙な相違が実は事実在即したものであることが確認されるところにも、よりいっそう、唐子人形の動きをつぶさに示してくれていることがわかる。すなわち、田中組の「傀儡師」では、さらに背中合わせになる動きが認められる。

## C 舟子

ここで、傀儡師が畳み込まれた後の、舟弁慶の場面の人形に目を移してみたい。

まず、最初は舟子が舟を巧みに操っている。この舟子は船頭と呼ばれているが、その表情は、竹田からくりの画証類と同様、劇的なものであり、愛嬌のある表情である。舟子の操る櫓は、伸縮式になっている。この舟は、三折りに収納されているので、櫓はそのときには縮んでいるのだが、舟が開いて舟弁慶の場面になると、糸の操作で引き伸ばして使えるようにするのである。これも巧みな配慮であり、舟が三折りになることを前提になされた工夫である。因みに、衣裳は新たに作り替えられたものであるが、人形の内部機構はそのまま用いられている。

この舟子は、現在の舟に同乗している人形のなかでは最も繊細な動きを見せる人形である。つまり、舟を操りながら、身体を前後に揺すり、櫓を漕ぐしぐさをして、さらに首を左右に動かすのである。かつては、知盛の怨霊の出現の前後で漕ぎ方のテンポが変わったともいう。

## D 義経

次に知盛の出現に対して、刀を振り上げて応戦する義経の人形についてみておきたい。義経の人形は、刀を持った手を上下させて知

盛に立ち向かうのだが、その際、長絹を脱いで太刀を抜いて立ち向かう。義経の人形は座ったまま所作をするので、その総高は二六・五センチ程である（前稿「竹田からくり『傀儡師』について」において義経の人形が立ち上がるという誤った記述をしている点をこの場を借りて訂正しておきたい）。

義経の人形の周辺を詳細に調査すると、その固定台の下に、現在は使用しなくなった引き糸が二本結び付けられていることが確認できる。これを引くと、義経の人形の首が左右に動くので、この二本の引き糸で義経の人形の首がかつては動いたものと推定すべきであろう。舟子の首が左右に動くところから言えば、主要人物の義経の首が動かないことの方が不自然であろう。

義経の人形の動きに関して、『機関竹の林』は刀を握る右腕を振り上げるように描かれているが、田中組の人形では両手を同時に振り上げる。しかし、この相違は必ずしも決定的なものではない。というのも、現在の田中組の義経の人形の手の動きは左右の腕の引き糸をつなげてあるために両手が同時に動くというかたちになっているのだが、引き糸を別々に操作すれば、刀を握る腕を振り上げることはかつてもできていたはずだからである。

なお、義経の衣裳について、『機関竹の林』では、片袖を脱いでいる。『機関千種の実生』等は長絹を脱ぐという姿には描かれてい

ない。これらに対して、田中組の義経は片袖ではなく、両袖を脱いでいるが、この長絹を脱ぐという細かな描写までが、竹田からくりの画証類と一致しているところが注目される。やはり、両者の間に相関関係を想定せざるを得ないように思う。細かなことであるが、竹田からくりの画証類には義経の腰には抜いた刀の鞘が、弁慶の腰には刀が差されており、田中組の人形には腰のものが見当たらない。しかし、これらの小道具類は、おそらく、かつてはこれらの画証類と同様に備わっていたものと考えてよいと思う。

義経の人形は、三折りの舟が開くと、結び付けた糸で自ずと起き上がるようにセットされている。

#### E 弁慶

続いて、打ち物技ではかなうまいと数珠を押し揉み、知盛の怨霊を退散させる弁慶の人形についても見ておきたい。弁慶の人形は立ち上がって数珠を押し揉み激しく禱る。頭巾を頭にいただき、鎧をなかに着込み手甲を付け、数珠を左手に持っている。座っている状態では、弁慶の人形の総高は二〇・五センチ、立ち上がった状態で三三・五センチ程である。その首は、『機関竹の林』のそれに最も類似しており、ほとんどそのままといってもよい。

弁慶の人形は現在は、立ち上がって両手を打つという所作で禱りの激しさを表現しているが、かつては、義経や舟子と同様、首が左

弁 慶



義 経



舟 子



田中組「傀儡師」の人形とそのからくりの構造



「機関竹の林」



【機関千種の実生】



資料と田中組「傀儡師」の写真資料

田中組「傀儡師」の人形とそのからくりの構造

傀儡師と唐子



【竹田新からくり】



【機関竹の林】



知盛

右に動き、さらに、首を後に反る動きができたようである。すなわち、弁慶の首を実際に動かしてみると、左右、後方に動く。ただし、前方には動かない。つまり、所作としてのうなづきは無い。これは弁慶が知盛を縛り伏せるときに激しく数珠を押し揉む所作をするのだが、そのとき首を後に反り返らせ、その動きを反復することによって、よりいっそう激しい縛りの所作を生むように工夫されていたことを示している。なお、弁慶の数珠を押し揉む所作も細かくいえば、水平に手を打つのではなく、両手を斜め下から上に向けて、左右に絞り込むように動かしている。両手の可動域の上限は肩あたりで、それ以上は上がらない。画証類のように両手を頭上に振り上げるような所作はできないのだが、その分、首を反り返らせる動きによって、その縛りの激しさを表わしたのではないかと推定される。

#### F 知盛

弁慶に縛り伏せられる知盛の人形は、衣裳は新しく作り替えられ、内部の部材も新調されているが、首、手足は古いものがそのまま使われている。台座も含めて総高は六四・五センチ、知盛の顔の部分の長さは五・五センチ、薙刀の全長は、五三・〇センチである。知盛の人形は腕を前方、後方、上方に動かす所作をする。それぞれの動きが三本の糸で操作されるのだが、それを丁字形の操作棒で操る。それを同時に引くと若干ではあるが、うなづく。この知盛の人形の

最大の特徴は、竹田風車と言われる薙刀を回転させる機構である。これについては別稿の操作方法のところで詳細に論じたい。竹田からくりの画証類に見られる薙刀をさまざまに遣うからくりの実態がこの田中組の「傀儡師」の知盛の所作で明かに捉えられる。

細かなことではあるが、知盛の人形は腕を後方に運ぶ糸を脚部の裏に通してあるために、腕の振りに連動して足拍子を踏むようになっている。通常は袴で隠れているので、その動きはほとんどわからないのだが、その内部機構を検討すると、明かに足拍子を踏む機構が認められる。これが、「機関竹の林」の足拍子を踏むという記述と一致することは前稿でも指摘したが、その装束は、なかでも前掲の「機関千種の実生」と同じく袴姿である。他は立付袴であり、この場合は引き糸を見えないようにどのように通したのか、別の工夫が必要であったかと推測されるが、知盛の人形の演技としては、この足拍子は不可欠のものであり、田中組の例から見て、こうした腕の動きと連動させた足拍子の演技をさせた可能性はきわめて高い。まさに、細かな部分に至るまで画証類と相関性を持つからくりといえる。ただし、烏帽子の上に打たれた兜の金具は新しく工夫されたものである。間瀬伊蔵氏撮影の写真には烏帽子姿の知盛が映っており、こうした兜の金具はなかったことがわかる。その意味でも「機関千種の実生」の絵との相関性の強さが窺えよう。

## G 山猫（鼬）

終段に登場する山猫は、実際には鼬の剝製を使うが、これも作り替えられたものなのである。この山猫が最後に飛び出すところは、剝製の鼬が、装填された発射台から打ち出される。この発射台は現在は、金属製であるが、以前のは木製でもう少し小さめであったという。現在のものは、全長が四三センチ、幅が二・四センチである。鼬はもともと、傀儡師の箱の前面の仕切り板で隔てられた約四〜五センチの間に収納されていたのだが、伝承の過程で操作の簡便化にともなって、箱のなかから直接操作できるように、仕切り板も外されるようになったようである。

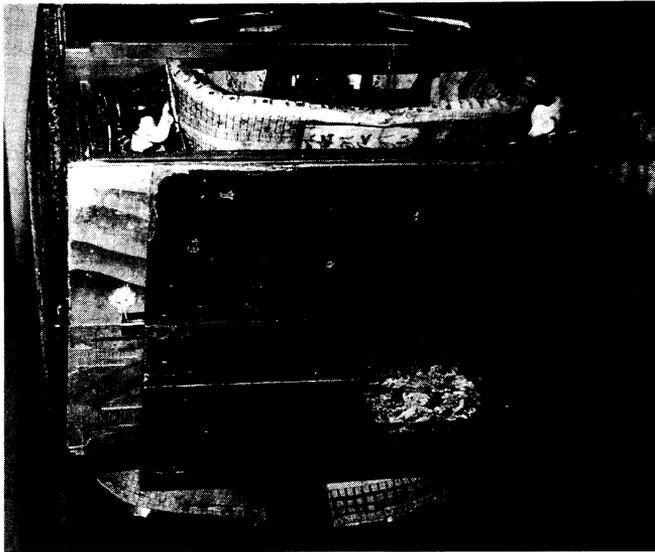
このように「傀儡師」の人形を検討してみると、竹田からくりの画証類のまさにモデルとなったのが、田中組に伝承されているからくり人形であったのではないかと思えてくるほどである。からくり人形の外貌、構造からみても、竹田からくりとのきわめて高い相関性を指摘できるのではなからうか。

## 三 傀儡師の箱と舟

ここで、「傀儡師」の演出にかかわる装置類に目を移してみたい。まず、傀儡師の上半身が折り畳まれて収納される、傀儡師の首掛けの箱に注目しておきたい。

田中組「傀儡師」の人形とそのからくりの構造

竹田からくりの画証類を一覧すると、この傀儡師の箱には、木目が入っているものとそうでないものがある。「竹田新からくり」、「機関千種の実生」には木目が入っている。その他の「機関竹の林」、「家土産竹の林」<sup>⑧</sup>、「機関梅早咲」には木目が入っていない。この三



傀儡師の新旧の箱

点は、構図も類似しており、なんらかの影響関係が想定されるのだが、今はそれについては触れない。『竹田大からくり双六』にも木目は描かれていないが、田中組「傀儡師」には写真のとおり、木目ははっきりと入っている。やはり、無地の箱は不自然であり、本来は木目のはいった箱が用いられていたであろう。この田中組の傀儡師の箱は、新たに作り替えられたものであるが、古い箱が現在も田中組の山車蔵に残っている。新旧の箱を前頁に写真で掲載していたが、その大きさはほとんど変わらない。箱の総高は三七・五センチ、正面は箱から波形に変化する時に蝶番で開くようになっており、箱の真ん中で切り返すようになっていいる。正面の波形は彫刻されている。側面には、後方に開く波板（幅三六・五センチ）と、前方に開く波板（幅三一・八センチ）が左右にセットされている。このうち、前方に開く波板は彫刻である。

注目すべきは、この箱の中央にある福助の絵柄である。『機関竹の林』には鮮明に鼓を打っている持姿の人物の絵柄が描かれている。『家土産竹の林』、『機関梅早咲』にも、ほぼ同じ絵柄が認められる。『機関千種の実生』は鼓を打っていないが、口上人のような人物が描かれている。因みに、『竹田新からくり』、『竹田大からくり双六』には、福助は描かれていないが、その部分が切込まれた状態になっている。田中組の傀儡師の箱にも、約一センチの切込があり、

外郭部縦二二・一センチ、横一八・二センチ、内郭部縦一一・一センチ、横一七・一センチの寸法である。その中に福助とおぼしき人物が描かれており、鉦を打つような仕掛けが施されている。これは、先の写真に示したように、作り替えるときにもそのまま剥がされて新しい箱に使われている。この鉦を打つ仕掛けは新しい工夫であろう。とすれば、『機関千種の実生』に近い絵柄となる



田中組「傀儡師」の福助

が、この鉦を打つという仕掛けも実は鼓を打つという意識で作られているのかもしれない。この点については十分に明かにはできないが、箱の中央の絵柄は、竹田からくりの「傀儡師」にも見い出されるものであり、さらに、これは元来、傀儡師の首から下げられていた箱に描かれていたものである。享保十五年（一七三〇）刊『絵本御加品鏡』にも同様の絵柄が描かれており、この箱に鼓を打つ人物が描かれた早い例は、『三井寺円満院障壁画』や天和二年（一六八二）

刊の『このころ草』等に、大鼓、小鼓を打つ演者が描かれている絵にまで遡る。因みに『人倫訓蒙図彙』の「あひすまひ」の箱には木目が描かれているが、箱の中央には「竹田新からくり」等と同様に福助とおぼしき人物は描かれていない。こうした体のものもあつたのかもしれないが、あるいは省略されて描かれていることも考慮すべきであろう。竹田からくりの「傀儡師」の箱には、田中組の例と同様に、確かに鼓打ちもしくは福助とおぼしき人物が描かれていたと考えられる。この点からも両者の関連性が確認されよう。

次に、舟の構造について簡単に触れておきたいのだが、その前に、乗船している義経、弁慶、舟子の位置について断っておかなければならない。現在、亀崎田中組に伝承されている舟は、義経、弁慶、舟子の順になっている。ところが、竹田からくりの「傀儡師」の画証類はすべて、弁慶、義経、舟子の順になっている。すなわち、『竹田新からくり』、『機関竹の林』、『家土産竹の林』、『機関梅早咲』、『機関千種の実生』にはすべて弁慶、義経、舟子の順で記されている。これらの画証類から見ると、田中組の「傀儡師」は、その伝承の過程で変化していったものかと推測される。

しかし、寛保元年の竹田芝居の江戸下りを当て込んだかと思われる絵双六「竹田大からくり双六」<sup>④</sup>の一図「くわいらいし舟べんけい」（傀儡師舟弁慶）には、義経、弁慶の順で描かれている。ただ

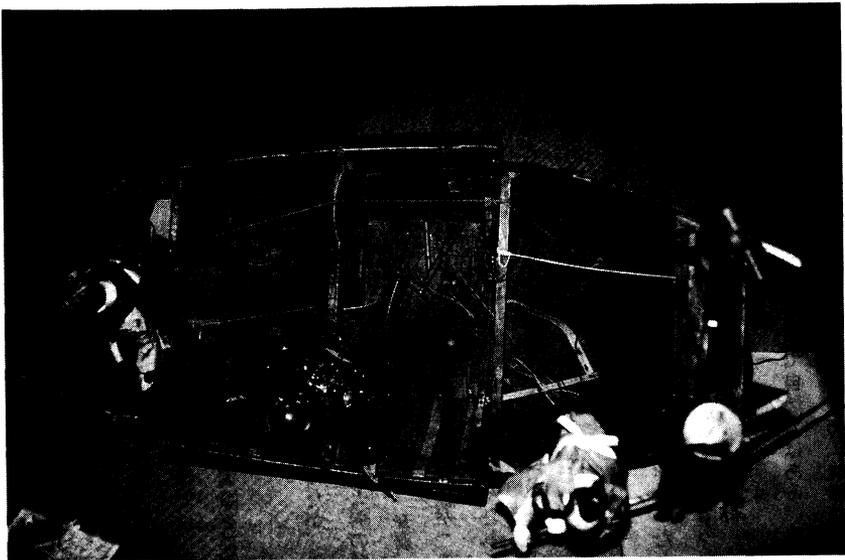
し、この図には舟子が傀儡師の陰になっているためか、描かれていない。だが、その点を除けば、この絵は十分信頼できる画証である。すなわち、前稿「竹田大からくり双六」について<sup>⑩</sup>においても触れたのだが、傀儡師のからくりと知盛のからくりが別々のからくり台で上演されている様子が描かれており、他の画証類では、その両者の関連があいまいであったのが、からくり舞台の実際を推測させてくれる点においてきわめて貴重な画証といえる。

本来、そこで指摘しておかなければならなかったのだが、この双六の図においてより貴重なのは、この舟に乗っている人形の順番である。すなわち、舟子は描かれていないものの、義経、弁慶、舟子の順で舟が構成されていることを示している唯一の画証がこの双六ということになる。この点からいえば、田中組に伝承されている「傀儡師」の舟の人形の順番も伝承の過程で変化していったというよりも、元来、この順番で伝承されてきたと考えるほうが自然になるだろう。他の画証類との関連で言えば、義経、弁慶、舟子の順のもの、弁慶、義経、舟子の両方の「傀儡師」の舟があつたと見ることができると。田中組の弁慶の人形が立ち上がったたり、座つたりといった上下動を伴うことからいえば、この人形が中央にセットされているほうが操作性、安定性という点で自然ではある。また、能「舟弁慶」との関連からいえば、竹田からくりの「傀儡師」も、元

来は、義経、弁慶、舟子の順であったのかもしれない。これについては詳細を明かにすることはできない。

舟弁慶の舟は新たに作り替えられたもののようであるが、以前の舟は田中組の山車蔵からも発見できなかった。傀儡師の箱の例からみれば、その大きさに極端な相違はなかったものと推測されるが、現在の舟と人形の大きさのバランスからいうと、もう少し小ぶりのものであった可能性はある。舟は三折りの構造になっており、船先側に義経の人形が固定され、中央部に弁慶の人形、櫓側に舟子の人形がそれぞれ固定されている。三折りの状態になっているときには、それぞれの人形がぶつかり合わないように工夫して、位置をずらしてセットしてある。義経の人形は舟が開く時に渡してある糸で自動的に立ち上がるようになっていて、舟子は、槽を漕ぐ所作をさせるためという事情もあり、糸を引いて立ち上げるようになっていて、舟の全長は、一一一センチ、幅が四七センチあるが、三折りの状態では、最長部が五〇センチ、最高部が五八センチある。

舟の底部には、三体の人形を操作するための引き糸を通す穴が設けられているが、現在は使用されなくなっている穴がかつての人形のさらに複雑な動きを想像させてくれる。この底部に円型の舟の固定台があり、その台の中央にこの舟全体を固定するための芯棒がついている。この芯棒を固定しておくための穴が、次に触れる傀儡師



舟を上方から撮影したところ

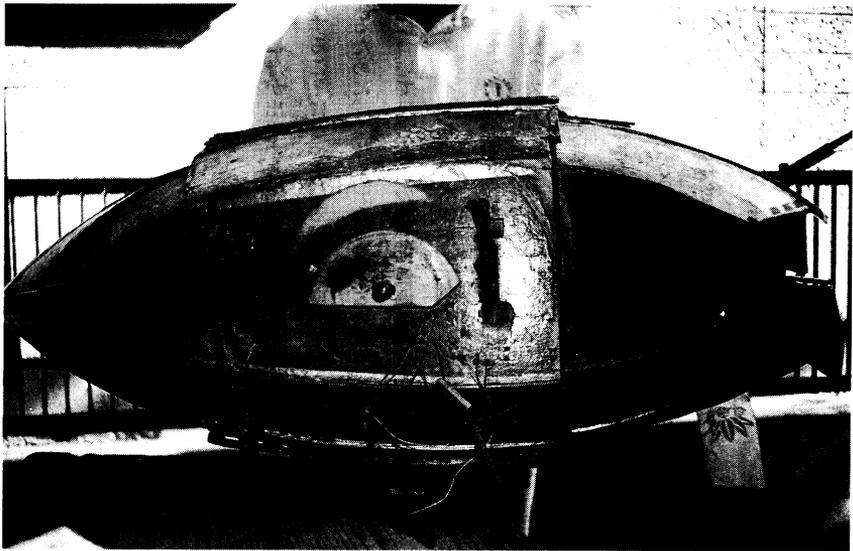
のスライド式の横木にあいている。現在の舟の円型の固定台は、舟の裏側（操作側）が切り込まれて、その切り取った跡に引き糸の操作用の穴がいくつか設けられている。この固定台の最長部は一・五センチある。

ここで注目すべきは、舟の底部とこの円型の固定台の位置である。すなわち、固定台の芯棒を軸に舟の底部の表側（観客側）と裏側（操作側）の長さを計測してみると、表側が一三・〇センチ、裏側が九・五センチと重心が表側にあることである。引き糸を裏側で操作すれば、このバランスが舟の横揺れを自然にもたらすことになる。また、円型の固定台が切り取られているために、その円弧の面に沿って舟はさらに横揺れ、縦揺れしていくことになる。舟はこのようにして波間を進むように演出されることになる。現在は、遣い手が舟の後で舟を揺らすようにしているが、この舟は操作の仕方によって、そのようにして波間を進むように作られている。もちろん、これは現在の舟の構造に即した推定であり、以前の舟がこれと同じ構造であったかどうかについては不明とせざるを得ない。

#### 四 「傀儡師」と神楽車

田中組の「傀儡師」は、神楽車の上山人形として、潮干祭の時に奉納上演されている。現在は毎年五月三日、四日両日に、神前神社

田中組「傀儡師」の人形とそのからくりの構造



舟の底部を撮影したところ

と尾張三社で奉納されるのだが、他の山車からくりと共に上演される。すなわち、東組宮本車、石橋組青龍車、中切組力神車、田中組神楽車、西組花王車の順で上演される。曳き廻し中は、昇降式になっている上山部分は山車を安定させるために下げられているが、からくりを上演するときには引き上げられて本来の山車の姿になる。

吹き流しが風に靡く山車の様子は美しい。「傀儡師」も、曳き廻しの時には、上山は下げられており、天井のすぐ下に、傀儡師人形は折り畳まれた状態で傀儡師の箱のなかに収納されている。天井には龍の模様が描かれている。もちろん、このままの状態で、傀儡師を起き上がらせる隙間はない。

さて、田中組の「傀儡師」は、神楽車の上山人形として、この山車の上で上演されるのが本来の姿である。当然のことながら、この山車と一体のものとして捉えておく必要がある。ただし、この山車のために「傀儡師」が作られたのかと言えば、その点についてはよくわからない。いずれにせよ、この山車には、「傀儡師」の上演のために必要なからくりの舞台機構に相当する装置が内蔵されている。その意味ではやはり、このからくりを山車の構造と関連させて捉えておく必要がある。そこで、ここでは、山車からくりとしての「傀儡師」と、それを搭載している神楽車との関連について見直してみたい。

まず、傀儡師の本体は、山車の上段に設置されている。前述したように、曳き廻しの時には、上山部分が下げられており、傀儡師は折り畳まれた状態で箱のなかに収納されている。からくりを遣うときに、上山部分は引き上げられ、傀儡師も起き上がった状態になる。山車の上山が昇降式になっているだけでなく、傀儡師本体も上下する機構になっている。すなわち、唐子踊りの後、傀儡師が折り畳まれた後に舟が出現するとき、傀儡師本体が、スライド式の支柱を下降することになっている。舟弁慶の場面を遣うときに高さが必要になるために、本体を引き下げることにしているそうである。その機構については、支柱の外郭に傀儡師本体が固定されており、その支柱をスライドして、本体が上下するのである。その上下幅は、約三十三センチ程である。もちろん最上部で傀儡師本体を固定するための木製のストッパーがついている。

因みに、この支柱の左右に付属している足隠しのための黒い板は興味深い。すなわち、傀儡師を遣っているときに、遣い手の足元が見えないように工夫されているのであり、竹田からくりの「傀儡師」が舞台上で上演されるときなどにも、こうした足隠しの用いられた可能性が十分に考えられる。

なお、この傀儡師を遣う遣い手の位置は、現在は上段であるが、かつては中段であったのではないかと推測も可能である。すな

わち、山車の強度からいえば、わざわざこうした処置をする必要はないのではないかと思われるのだが、上段の横に渡した部材の一部が明かに挟られている。この挟った部分には人が一人入ることがができるだけのスペースができることになる。下の写真はそこにかりに入ってもらったところである。このとき、遣い手は山車中段に立っており、傀儡師を下から操作しているかたちになる。

ところが、前稿においても若干触れているのだが、現在の田中組の「傀儡師」は、舟弁慶の場面に転換していくところを、連続のだからくりで演出することができない。しかし、かつて、それが連続で上演されていたことはほぼまちがいない。というのも、傀儡師本体の支柱の内側にスライド式の柱があり、そこに渡されている横木に舟をかつて固定していた跡が残っており、その横木が回転して傀儡師の背部に三つに折り畳まれている舟を箱の上に押し上げる機構を備えているからである。その横木を固定しておくために木製のストッパーが使用されている。<sup>17</sup>

だが、この山車の上で連続して動く大からくりとして上演することができていたのか（この山車は、田中組の山車としては新しいもので、古い山車は現在碧南に残っており、その上段の四本柱の間隔は現在の山車のそれとほとんど変わりはないので、現在のところ、この山車の構造の変化によって、大からくりの演出ができなくなっ



かりに中段で操作した場合の遣い手の位置

たというのではないようである。これについても今後の詳細な調査が必要である。)と、いうことを考えてみると、現在のよう山車の上段で遣うかぎり、舟を傀儡師人形の本体の背部にあらかじめ固定したままでは、唐子を遣うときにこの舟が邪魔になつて唐子踊りの場面が演じられなくなる。かりに山車の中段で糸を操作したとすれば、唐子を下から操作することができ、舟をあらかじめ傀儡師本体の背部にセットしておくことができるようになるのである。

このように、中段での引き糸の操作が可能であれば、こうした下遣いの操作によつて、「傀儡師」の連続した大からくりの演出は現在の山車の上でも行なうことができることになる。少なくとも、

「傀儡師」が本来の動きを滞りなく展開するためには、こうした下遣いの操作方法が必要であつたのではなからうか。ただし、これはあくまで、この山車の上で「傀儡師」を本来のように遣つていたと仮定しての推測である。いささか想像を逞しくし過ぎたかもしれないが、田中組神楽車は、山車の構造がいわば、からくりの舞台機構と同様に捉えることができる例として注目される。また、それだけに止まらず、亀崎に伝承されているからくり人形と山車についても同様のことが指摘できるように思う。さらに調査を重ねていく必要がある。

「傀儡師」のからくりの構造の特徴は、この支柱の外側と内側に



傀儡師本体の支柱の内側のスライド機構。下の横木が上昇する。

設けられたスライド機構にある。これなくして、傀儡師人形の連続した大からくりの変化はありえない。すなわち、外側のスライドによつて、傀儡師本体は舟に変化するときには下降する。そのとき、内側のスライドで舟を固定した横木は相対的に上昇することになる。

そして、傀儡師本体の背部に固定されていた舟が出現することになるのである。従来の調査では、この二重のスライド機構が見落とされていたために、このからくりのかつての動態が捉えられなかったのだと言える。からくり調査が、そのからくりの現状報告に止まることから、その動態を可能性として追及していく方向を目指すべきことを示している好例と言えよう。山崎構成氏の調査が誤っていることについては既に指摘しておいたが、からくり調査は、もう一度、人形そのものの詳細な調査、しかも、かつてのからくりの絵画資料を参照しながら、人形の動きを可能性として捉えることから始めなければならぬ。このスライド機構はそうした意味においても象徴的な事例と言えよう。

次に知盛の人形の場合を見ておこう。知盛の人形が海中から現われる機構は、山車に仕組まれており、下の写真に見られるように、知盛の人形を操作する樋の支柱がスライド式になっており、その支柱を上下することで、知盛の人形が海中から出現したり、消えていったりするのである。せり上がり樋は総高一二三センチ程あり、知盛の人形は約八五センチ程度上下することになる。そのスライド機構に、上昇したときに固定しておく木製のストッパーが装置されているのは傀儡師と同様である。

田中組「傀儡師」の人形とそのからくりの構造



樋のスライド機構

前述したように、知盛の人形は「竹田大からくり双六」の画証によつて、竹田からくりでも、傀儡師本体とは別のからくり台を使って演じられたと考えることができる。おそらく、竹田からくりも、田中組「傀儡師」と同様に、樋形式のからくりを用いたのであろう。海中から出現するというからくり演出も、従来知られている絵尽や番付の画証類では、その動きを特定することが難しかったのだが、この田中組「傀儡師」を媒介にすると、かなり明確に捉えることができるようになる。すなわち、この知盛の人形は三人で遣うかたちになっており、舞台上で上演するときには、あらかじめ別のからくり台に樋形式の知盛の人形をセットしておき、スライド式に知盛の人形が出現するような装置が必要になるのではなからうか。

竹田からくりが舞台においてどのように演じられていたものであ

るのか。この点については、竹田のからくりがほとんど残存していないために説明すること自体が困難であった。だが、田中組の「傀儡師」を分析していくことによって、その演出を知る手掛かりが多なりとも得られるようになってきたように思う。本稿はそのためのいわば中間報告であり、今回は主に人形と装置を中心に、「傀儡師」の構造を探った。

それにしても、寛保元年より以前に興行されていた竹田からくり「傀儡師」が、これが言い過ぎであるならば、それにきわめて近いからくりが、現在にまで伝承されてきているという例は日本では類稀な例と言えるであろう。そして、これが、奉納上演という体裁をとっているにせよ、興行に近い形態で上演されてきたからくり人形であるという点において、世界的にみてもきわめて珍しい、注目すべき例と言えるであろう。

本稿および前稿において、現在のあるいは、今はすでに失われた、かつての田中組の「傀儡師」の動態を推測しながら、それを手掛かりに竹田からくりの動きを推定してきたのだが、はたして、田中組の「傀儡師」の大からくりとしての連続した動き、あるいはより繊細な動きが実際に、一部なりと上演することが可能であるのか、復元はどこまで可能であるのか、また、現在の伝承も含めて、そこからどこまで竹田からくり「傀儡師」に迫ることができるのか。こう

した課題に対しては、実験的上演をもつてのぞむ必要があるだろう。そこで、一九九四年十月九日（日）、同志社大学至誠館三十二番教室において、田中組の皆様の御協力を仰いで復元上演を試みる予定である（同志社大学文学部国文学専攻創立四十周年・国文学会設立三十周年記念企画事業の一環、一般公開制）。実際には、「傀儡師」のかつての動きを現在の伝承者の技術で再現することはかなり難しいと予想されるので、滞りなき復元上演とはいかないだろうが、竹田からくりの舞台上に繰り広げられた「傀儡師」の在りし日の姿にできるだけ迫ってみたい。

口上「御見物御出のほと奉希候」

最後に本稿を成すにあたり、愛知県半田市田中組の皆様には多くの御協力を賜りました。人形本体の調査、人形の動態についての聞き書き、亀崎の祭礼に関する調査等、多方面にわたる御援助を得ました。また、本稿は一九九三年度同志社大学学術奨励研究の成果の一部でもあります。最後になりますが、国立国会図書館、東京都立中央図書館には、資料掲載の御許しをいただきました。ここに記して謝意を表します。

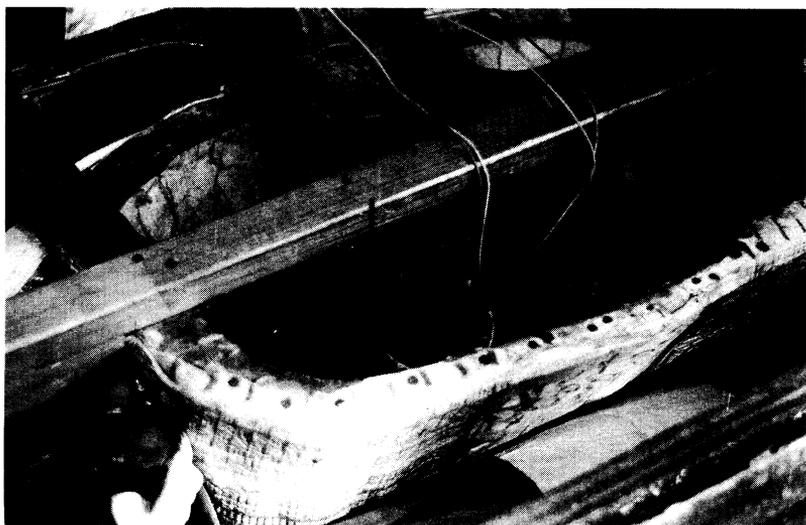
注

① 「歌舞伎研究と批評」十二号（平成五年十二月）。

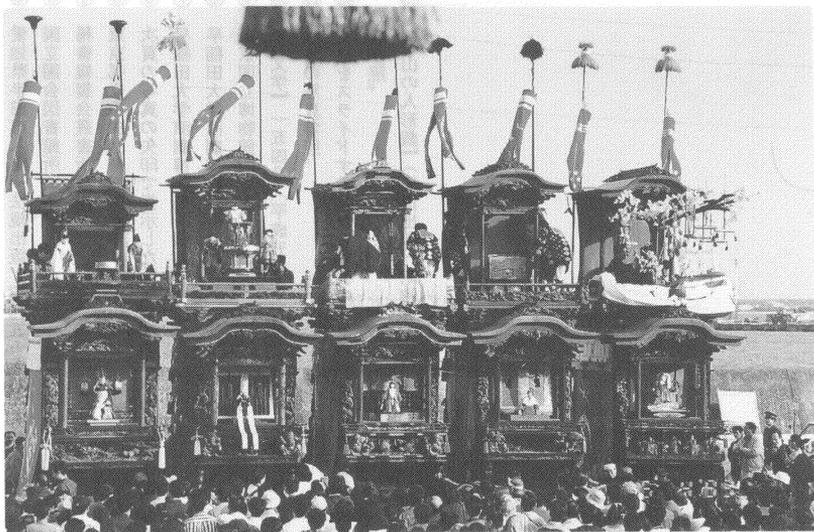
- ② 愛知県半田市（第一法規出版）昭和五十九年一月。
- ③ 国立国会図書館所蔵本。
- ④ 稀書複製会叢書所収本。
- ⑤ 東京都立中央図書館所蔵本。
- ⑥ 次頁の写真の矢印で指示した箇所に鯨のバネの跡が見い出される。
- ⑦ 早稲田大学演劇博物館所蔵本。
- ⑧ 早稲田大学演劇博物館所蔵本。
- ⑨ 東京国立博物館所蔵本。
- ⑩ 『人文学』一五四号（平成五年十一月）。
- ⑪ 次頁の写真参照。
- ⑫ 支柱をスライドする柱から木製のストッパーが出ている。次頁以降の写真参照。
- ⑬ 『曳山の人形戯』（東洋出版）昭和五十六年十一月。

田中組「傀儡師」の人形とそのからくりの構造

注⑥



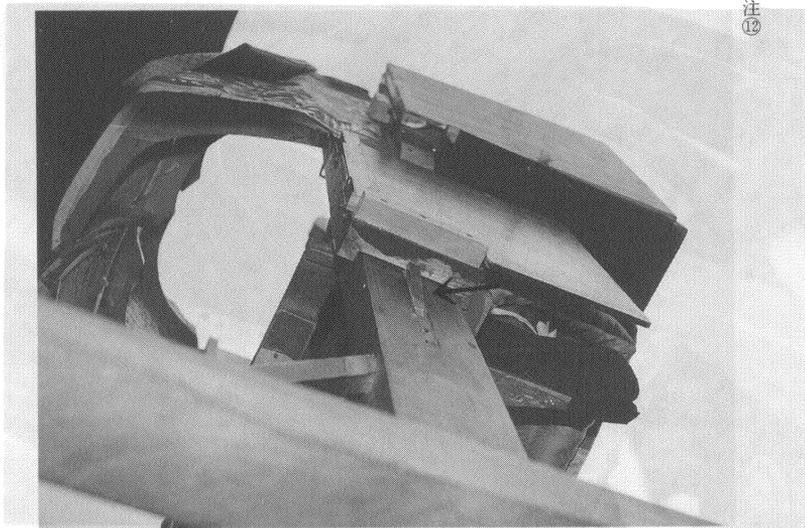
傀儡師本体の首を固定する装置の左側（矢印）に鯨のバネが用いられた痕跡が残っている。



注⑪

田中組「傀儡師」の人形とそのからくりの構造

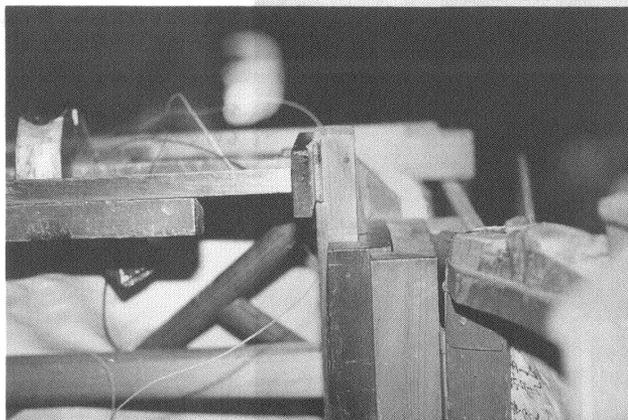
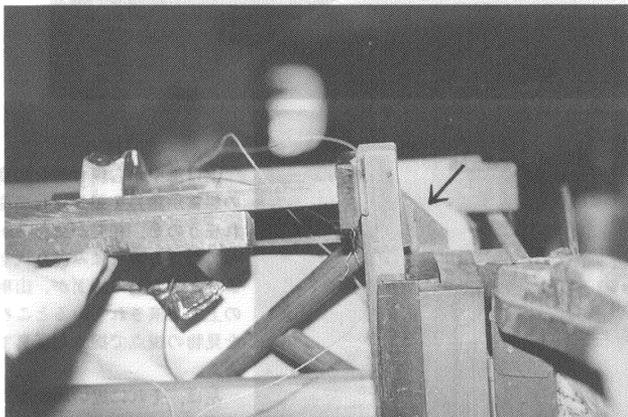
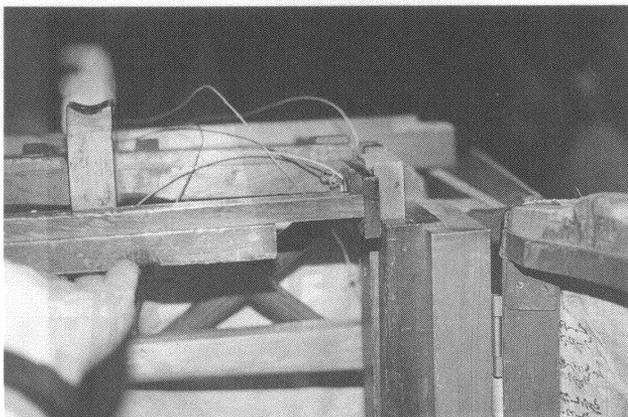
県社（神前神社）の前に、五台の山車が揃い、からくりの準備をしているところ。右から二番目が、田中組神楽車である。ちょうど上山の部分を引き延ばしているところである。



注⑫

このように、異なる材料で作られた傀儡師本体を固定しているストラップを繋ぎ合わせることで、山車の本体と一体化する。

田中組「傀儡師」の人形とそのからくりの構造



注  
⑫

傀儡師本体の右側の支柱の拡大写真である。手で支えているのが、スライド式の横木であり、この部分が90度回転してそこに舟が固定されている。この横木が下から上昇してきてAのように固定位置手前まで来る。

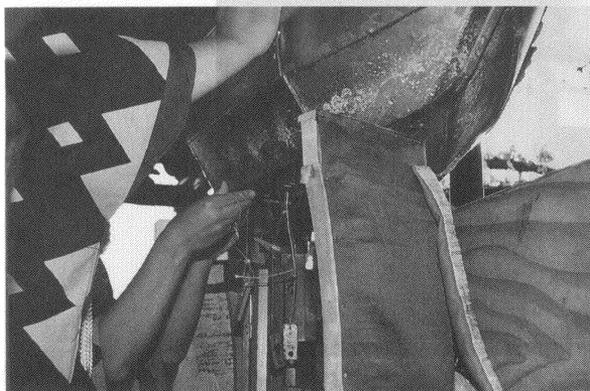
固定位置の上まで上がりきると、横木を支えているスライド式の柱に装置された木製のストッパーがBのように跳ね上がってくる。そして、そのストッパーの働きでCのように横木は適正な位置に固定されることになる。

最後に、舟弁慶の場面が山車の上で奉納上演されている写真を掲出する。



上は海中から現われた知盛の怨霊が薙刀を振り回して荒れ狂うのを、弁慶が立ち上がって数珠を押し揉み禱り伏せようとしている場面が、山車の上で上演されているところを見物の視点で捉えた写真である。

左は、それに近い場面を、山車の上で操作する側の視点で捉えたものである。隣の山車から撮影した写真である。



左は、舟を操るところを、やはり、山車の上で撮影したものである。